

【東京】全国でも少ない在宅注力の歯科「訪問でも治療の多くが可能」-萩野礼子・おはぎ在宅デンタルクリニック院長に聞く◆Vol.1

2021年7月16日（金）配信 m3.com地域版

在宅医療に注力する全国でも少ない歯科医院が東京都文京区にある。歯科医師の萩野礼子氏は2019年に「おはぎ在宅デンタルクリニック」を開業し、スタッフと協力しながら患者宅を訪問する日々を送る。現在は機器の進歩により外来診療で行う治療の多くを訪問でもできるようになり、患者は順調に増えているという。訪問歯科診療を始めたきっかけや、「外来では気付けない多くのことが分かる」という同診療の魅力聞いた。（2021年6月15日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)

——まずは、おはぎ在宅デンタルクリニックの概要をお聞かせください。

当院は2019年3月に開院した歯科のクリニックで、在宅医療として訪問歯科診療を中心に行っています。現在の患者さんの数は50～60人ほどで、訪問数は1日に7～10人ほど。患者さんのほとんどはご自宅にお住まいの方で、今のところクリニックとして契約している施設はありませんが、入居者やそのご家族から直接ご依頼いただき、施設に訪問しているケースも数件あります。

スタッフは私のほかに常勤の助手が1人、非常勤の歯科医師が1人、非常勤の歯科衛生士が4人在籍しています。



萩野礼子氏

——訪問歯科に注力するクリニックは全国的にも少ないと思います。どんな治療が可能でしょうか。

確かに医科とは違って歯科ではまだ在宅医療に注力するクリニックは少ないので、「訪問歯科としてどんなことができるのか」と疑問に思う人は少なくないかもしれません。結論から言えば、大がかりな外科治療を除き、外来診療で行っている治療の多くを訪問でも可能です。

今は機器の進歩によって小型のレントゲンや各種治療機器を携行できるため、口腔ケアや虫歯・歯周病の治療、詰め物やかぶせ物、入れ歯の治療などをご自宅で行うことができます。小さなう胞（袋状の病変）を摘出したり、歯周病の治療のために歯肉を切り開いたりするなど小外科治療も行うことはできます。

そんなふうに治療の手立ては多くありますが、そもそも在宅医療の場合、治療することが主な目的になりやすい外来診療とは違い、患者さんの生活や人生をみていく側面が強くなります。治療を行うことで患者さんの全身に悪影響を与えてしまうと本末転倒ですから、「その行為が患者さんにとって本当に必要なことかどうか」はよく考えるようにしていますね。

——患者の状態や主訴としてはどんなものが目立ちますか。

在宅医療を中心に行っている医科のクリニックから患者さんをご紹介されることが多いので、必然的にがんの末期などで死期が近いと考えられる方が多い状況です。そんな患者さんの口腔内の問題としては、「入れ歯が合っていない

い)「薬の副作用で口の中の乾燥がひどい」「痰が口にはりつく」などが目立ちます。認知症などの影響もあるのだと思いますが、入れ歯をゴミ箱に捨てるなどしてなくしてしまうご高齢の方も少なくありません。

また、私は嚥下の治療に力を入れているため、食べ物をうまく食べられない状態の方も多いです。



患者宅に携行する歯科治療機器のセット

——先生はなぜ、担い手の少ない訪問歯科を行おうと。

元をたどれば、高校2年生のころに阪神・淡路大震災に直面したことが影響しています。私の地元は神戸市で、当時住んでいた自宅は無事でしたが、周囲は騒然とした状況になりました。私は母と2人で避難所を回って水を配ったり、炊き出しの手伝いをしたりしました。すると、配られたおにぎりを前にしても、入れ歯を自宅から持ち出せなかったために「食べられない」と嘆くお年寄りが何人もいました。

その一方で、震災直後に開いていた飲食店でポトフを食べた私は、温かいご飯を食べられることにとても感動しました。「食べ物をうまく食べられないのはとてもつらいことなんじゃないかな…」と、避難所で出会ったお年寄りたちの苦悩も想像されました。

訪問歯科診療を初めて経験したのは、東京医科歯科大学歯学部を卒業した後に進んだ大学院の2年目のころです。私が専攻した顎顔面補綴（がくがめんほてつ）の教室の先輩がアルバイトとして訪問歯科診療を行っていて、妊娠による体調不良のために代役を頼まれました。私が訪問したのは70代後半の女性のご自宅で、その時は入れ歯の調整をしたのですが、これがとても楽しかったのです。祖母の家に遊びに行っているようなリラックスした気分で診療に臨めただけでなく、診療自体も面白く感じました。

外来診療の場合、調整した入れ歯を患者さんにはめてもらってその時に不具合がなくても、いざご自宅で食べたときに痛みを感じてしまう、ということは往々にしてあります。しかしクリニックで私たち歯科医師は食べる場面までは見られず、「何か問題があればまた来てくださいね」としか言えません。自分の作った入れ歯が実際にどう機能しているのか見られない。そんな歯科医師としての物足りなさが訪問歯科診療の場合は解消します。

診療している場所は患者さんのご自宅ですから、調整した入れ歯を着けた状態で食べてもらい、感想を聞いた上で再調整することができますし、患者さんが普段どんなものを食べているかも見られるので、患者さんの希望や食事の内容に沿ったアドバイスも送りやすい。

患者さんが食べている姿勢が分かることも訪問歯科診療の大きな長所で、テーブルとイスの高さが合っていないかったり、肘をつきながら食べていたりしていると嚥下がスムーズに進まないことがあります。「食べる」と一口に言ってもそう単純なことではなく、さまざまな要素が絡み合っていてそれがなされているわけなので、外来診療で口の中を見ているだけでは気付けないことがたくさんあるのです。

◆萩野 礼子（はぎの・あやこ）氏

2004年に東京医科歯科大学歯学部を卒業後、東京医科歯科大学歯学部付属病院、国立がん研究センター中央病院歯科などに勤務。常磐病院歯科では福島県いわき市初となる訪問歯科の立ち上げに参画し、2019年に「おはぎ在宅デンタルクリニック」を開業。日本顎顔面補綴学会認定医。嚥下食を提供する和食店「甚三紅（じんごもみ）」も営む。

記事検索

ニュース・医療維新を検索

